
かくれんぼ(鬼の男編)

樋浦蓮斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かくれんぼ（鬼の男編）

【Zコード】

Z0131P

【作者名】

樋浦蓮斗

【あらすじ】

以前書いた、かくれんぼ（日本代表への道のり）を鬼目線でリメイクしたような感じです。

(前書き)

出来る」となら、前作のかくれんぼ（日本代表への道のり）を先に
読んで頂きたいです。

『西暦2060年、オリンピックの正式種目に、かくれんぼが採用されました。』 テレビのニュース速報が流れた。

次の日、各メディアでは、来月に日本代表を決める大会が開かれる事が報じられた…

今日は月曜日、週に一度の休みの日だった。

「ふあーーあ」

大きなアクビしながら、僕は布団から出た。
眠い目を擦りながら、「コーヒーをいた」。

猫舌の僕は「コーヒーをそのままにし、ポストに新聞を取りに行つた。
新聞を取り出すと、「パサツ」という音。

足下に目をやると、一通の封筒が落ちていた。

「なんだろう?」

部屋に戻り、軽い気持ちで開けてみる。

『かくれんぼの大会の鬼をやつてくれませんか?』

そう記された文の下には、電話番号が書いてあった。

「…やるか、やらないかは別として、とりあえず電話はしたほうが良いかな」

お人好しな僕。

きっとこういう人間が詐欺とかに引っ掛けてしまうんだろう。
自分でもわかつてはいるが、この性格はなかなか直せなかつた。
電話をかけると、担当の人だかが出たので、何故僕が選ばれたのか
聞いてみた。

「去年あなたは県のマラソン大会で、優勝しましたよね?」

「ええ…まあ一応」

「この大会の鬼は、非常に体力を使う仕事なんですよ
そういうことか。

「一応謝礼もお支払いしますし、引き受けてくれませんか?」
なんか色々聞きたいことがあつたが、やっぱりお人好しな僕。
「わかりました。やつてもいいですよ」

あっさり答えてしまつた。

どうも電話は苦手だ…

その後、大会の日時や場所、そしてルール等を事細かに説明された。
「…では当日9時までに集合ですね。…はい…はい、わかりました、失礼します」

と言つて、僕は電話を切つてしまつた。

とりあえず、なんとか休みを取つて行くしかないかな…

そう思い、僕は少し小さなため息をした。

……大会当日……

僕は言われた通り、約束の9時に会場に来ていた。
大会本部に行き、更に詳しい説明を受けた。

鬼役の人は、他にも9人いるらしい。

とりあえず僕は、他の9人に軽い挨拶を済ませ、大会開始を待つた。

現在午前10時

開会らしき物が始まり、僕は他の鬼の人達と一緒に、控え室で待機
していた。

時折、司会者の声とは別に、怒号やブーイングが聞こえた。
何か恐いな…と少し不安になつた。

現在午前11時

どうやら参加者は合図と同時に隠れ始めたようだ。
もちろん僕らにはその様子は見えていない。

皆軽い準備運動をして、出番を待つた。

現在正午

甲高い笛の合図とほぼ同時に、係りの人人が来た。
「皆さん出番です。お願いします」そう言われ僕らは外に出ていった。

かくれんぼなんていつ以来だろう…

まあ鬼より隠れる方が好きだったけどな。
と思いつつ、参加者を探し出した。

参加者とはいわゆるゼッケンを受けた人達だ。
まずは、自分なら何処に隠れるか考えた。

そして、さつき配られていた地図を見ながら、遠くにある公園を曰
指して走り出した。

狙いは2つ。

隠れる人は、「なるべく鬼から遠ざかりたい」と考えると思ったからだ。

名付けて、
『1人口ーラー作戦』

200人近く居ても、24時間あるのだ。

こつちは10人いる。

僕でも20人位なら見つけられるだろう、と少し楽観視していた。

現在午後12時22分

…「あつ！」

あそここの物陰で何かが動いた気がした。

僕は自分の気配をなるべく消しながら、ゆっくりと近づいた。

そして、素早く物陰を覗くと、不自然なダンボールの山。まさか…

恐る恐るダンボールを持ち上げると、体を丸めてかがんでいる男性。

体にはゼッケンが。

…えっと確か…

「見つけた！」

そう言つて男にタッチした。

そして、携帯を取りだし、本部にゼッケンの番号を伝えた。

やつた！見つけられた！

浮かれる僕とは対照的に、明らかに不満顔な男性。まるで僕が悪いみたいな雰囲気だ…

氣まずくなり、僕はまた公園を田指し走り出した。

でも…なんか楽しくなってきた！

徐々にテンションも上がってきた。

少しずつだがコツをつかんできて、公園に着いた頃には、既に6人程見つけていた。

現在午後1時55分

ここにも怪しい場所がたくさんあった。
まずは、少しベンチの陰に置かれているゴミ箱。
中が空なら、人が隠れるには充分だ。
小走りで近づき、勢いよく蓋を開ける。
もう最初の時のような緊張感はない。
むしろワクワクしている僕がいた。

ガバッと開けると、中にいた人は少しビクッとしたのがわかつた。
その姿に何処か優越感を覚えたが、気付かれたらマズイと思い、毅然とした態度で本部に報告した。

午後2時13分

トイレの中で1人（個室はルール上禁止）、少し奥の木陰でもう一人見つけた。

僕が今まで見つけた人数は、9人。

さあて次はどうしようかなーアドレナリンのせいいか、走つたりして
るが、まだ疲労感は無かつた。

現在午後3時13分

これでもかつていうぐらい公園は調べ尽くした。

…もうここには用はないな。

僕は街中を探すことにした。

日没まではもはや数時間…今のうちになるべく見つけないと厳しくなると思つた。

現在午後5時35分

街中では路地裏や、物陰など意外な程多くの人を見つけられた。

多くの人の場合、走つて逃げ出しが、こつちはマラソンの優勝経験者だ。

逃げきれるはずもない。

驚異的な追い上げの甲斐あつて、日が暮れる頃には20人超の人を見つけていた。

暗くなってきたこともあり、一旦本部に戻ることにした。
本部に着くと他の鬼の人達も戻つていた。

現在午後6時

未だ見つかってないのは11人。
辺りはすっかり暗くなっていた。

係りの人の話では、夜は待機で良いとの事。

暗くて見つけられる可能性が低いことと、参加者の忍耐力を試すためだそうだ。

何だか少しかわいそうだと思ったが、半日走り回った疲労で、その日はすぐ眠りについた。

現在午前7時

足には少しだるさが残っていた。

それでも僕はまた走り出した。

他の鬼達と情報交換したが、大抵の場所は探し尽くしていた。
考えられることは、鬼に気付かれないように移動しているということだった。

と言つわけで、もう一度昨日の公園に行つてみることにした。

午前7時52分

公園の手前まで来たが、学生や、サラリーマンが多く歩いていた。
僕は辺りをキョロキョロしながら公園に近づいた。

……！

遠くの木陰から、ゼッケンを付けた人が走り出すのが見えた。

「いた！」

そう思わず口に出すと同時に、心の中では「やつたあー」と捕まえるのを確信した。

何せ僕から逃げられた人は未だいないのだから。

そう思うと足のだるさも忘れ、全力で走り出した。

ところが、なかなか差が縮まらない…

それどころか、少し離されていくような気がする。

「ヤバイ…」

僕はこの大会で初めて焦つていた。

本気で走った。

プライドも肩書きも忘れ、がむしゃらに走った。

街中まで来る頃には、差はだいぶ縮まった。

持久力ではやっぱり僕の勝ちだ。

ゼッケンを付けた人は、必死なのだろうか、こっちを振り返ろうともしない。

その人まで後10数メートルというところで、急に角を曲がり、路地裏に入つていった。

…見失う！

そう思い、慌てて路地裏に入ると、肩で息をする男の人。どうやら、僕が後ろにいることに気づいてないらしい。肩をそつと叩くと、その人が固まるのがわかつた。

「見つけた！」

113番を付けたその男性は、呆然としている。

僕はいつもと同じ様に、本部に連絡した。

どうやら未だ見つかっていなかつた人は、彼を入れて3人だけだつたらしい。

「惜しかつたね。あなたを入れて後3人だつたんですよ」

僕は初めて見つけた人に声を掛けた。

それは、称賛とねぎらいのつもりだったが、彼は上の空だった。

現在午前10時5分

残りの2人を探しに向かつた。

途中でもう1人見つけたとの連絡を受けた。

…後1人。

しかし、その後1人がどこを探してもいない。
隠れてると言うより、本当にいなんじゃないかと思つべうりいだつた。

現在正午

ついに見つけられなかつた。

結局僕達鬼は、1人の人を残すことになつてしまつた。

本部に戻るともう表彰式が始まつていた。
…ということは、最後の人は、意外と近くにいたのか……
ちょっと悔しかつた。

「…でもまあ いつか」

熱くワクワクした日を過ぎさせて、少し満足していた。
それに、この大会で僕は、少し自分に自信が持てた気がした。
今なら、変な勧誘の電話だろうが、訪問販売だろうが、キッパリ断
れる。

もう僕はお人好しじゃない。

「よし！疲れたから帰つて寝よ」

僕はゆっくりと家路に着いた。

… 1週間後

僕のもとに全国大会の案内状が届いた。僕が1番多くの参加者を見つけられた鬼らしく、是非また鬼をやつて下さいとの事…
少し笑つて僕は思つた。

「やっぱ断れないや」

(後書き)

前作が処女作だったのですが、少しは上達してたでしょうか？

余談ですが、実はかくれんぼの大会は、本当に日本で開かれている
みたいです。

勉強不足で今日まで知りませんでした。
申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0131p/>

かくれんぼ(鬼の男編)

2010年11月20日01時43分発行